

(NGO/NPO用)

グループ エコライフ

所在地	〒901-2121 浦添市内間 4-13-8 TEL:098 - 877 - 6220 FAX:098-877-6220 E-mail: onewest@nirai.ne.jp		
ホームページ			
設立年月	昭和 61 年 4 月 *認証年月日(法人団体のみ) 年 月 日		
代表者	西江 重信	担当者	西江 一道
組 織	スタッフ 4 名(内専従 1 名) 個人会員 60 名 法人会員 名 その他会員(賛助会員等) 名		
設立の経緯	昭和 61 年 4 月 プランエコライフを組織 廃食油を原料として石けんづくりに取り組むが上質石けんが作れず活動を一時棚上げ、主宰の個人活動期。 平成 4 年 7 月 組織をグループ エコ・ライフに改め活動を再開、以降「運動から活動へ」をかかげ環境保全・再生活動・啓発活動に取り組む。 平成 8 年以降 十数年来訴え続けてきた総合的な環境学習センターを設置運営すべく取り組む。		
団体の目的	地球環境の保全・再生活動を通して、自己の社会性を高め、地域社会の新たな精神文化の構築に寄与する。 限りある資源を大切に使い、環境保全の生活実践を心がけ、かけがえのない地球を後代に引き継ぐための活動を行う。		
団体の活動プロフィール	主な事業 現在 総合的な環境学習センター整備中 平成 16 年 11 月「環境学習・体験活動 - 楽しく“かんきょう”しよっ」小学生プログラム実施予定 平成 16 年 9 月「世界自然遺産セミナー実施」 平成 14・15 年度「『川と海と里と森』生きがいづくり知恵つたえ」3泊4日シニア・シルバープログラム実施 平成 15 年度「環境学習・体験活動」指導者養成講座実施 平成 12・13 年度「“生ごみ”で地域づくり人育て文化創り」プログラム実施 平成 11・13 年度「雨水による水辺ビオトープづくり」プログラム実施 平成 13 年度 表土流出抑制型畑地造成の実証 平成 13 年度以降毎年 4 回「田んぼの学校・めだかの学校」プログラム実施 主な政策提言 平成 13 年 沖縄県国頭村に「国頭『めだかの里』づくりにむけて」提案 平成 12 年 北部市町村会に「北部広域のごみ問題解決のために」—減量化、広域処理の実験と溶融化の模索—を提案 平成 12 年 那覇市・浦添市・久賀町に「生ごみで福祉のまちづくり、人育て、文化創り」—循環型社会の構築に向けて—を提案 平成 12 年 林野庁に「林業活性・公益機能増進・国土保全『広域流域間交流事業』提案 平成 9 年 林野庁 林政審へ「間接林業—持続的林業と国土保全のために—を提案		

活動事業費（平成15年度）2,486,603円

政策のテーマ 未利用資源完全循環のしくみづくり
— 生ゴミで地域興し 人育て 文化創り —

■ 政策の分野

- ・ 持続可能な循環型社会の構築
- ・ パートナーシップの構築による都市問題の解決と「食糧・農業・農村」の活性化

■ 政策の手段

- ・ 伝統とエコテクノの融合、各主体の協働による地域の活性

団体名：グループエコライフ

担当者名：西江一道

政策の目的

膨大な量の食品残渣を飼料化・液肥化し、家畜排泄物と腐敗生ゴミ・粗雑残渣等でバイオガスを発生させエネルギーとして活用を図り、環境共生型「食料・農業・農村」のかたちを創造する。

都市の食品残渣を分別・収集する社会的しくみを構築し、循環型社会の形成を図り新しい文化の萌芽をめざす。都市と農山漁村の交流・対流のしくみを創り、資源の循環活用による両地域の活性化につなげ、「環境学習・体験活動・食育」のテーマ・フィールドとしてこの事業を推進する。

背景および現状の問題点

「ゴミ問題は生ゴミ問題」といわれながら堆肥化や飼料化等の実証的取り組みはあるが、家庭の生ゴミも事業系の食品残渣も再資源化を一般化する社会的しくみをつくれないでいるのが現状である。

生ゴミは、つい50年前まではほとんど全て家畜の餌として利用されてきた。いわゆる残飯養豚はアジアでは自然のこと。現在でも、韓国では70%、欧米でも40%におよぶという。わが国では1965年には豚1頭当り200kg以上だったのが1998年には数キログラムに激減したという報告がある。

わが国では、年間2千万トン以上の穀類が輸入されその大半は家畜の飼料として利用されているという。2千万トンに近い食品残渣を排出しながら。地球上の8億4千万人が飢えているという厳しい現実にあって、そのことをどう理解すればよいのか考えこんでしまう。

家畜は、学術用語で「ライブ・ストック・アニマル」と使われるという。ライブ・ストック・アニマルとは「日常的に人間の食とは競合しない、人間の食し得ない素材を摂取して成長し、いざという時に人間に対して良質な蛋白質と脂肪を与えてくれる動物」という意味だという。

私たちの生き方の“のぞき窓”といわれるゴミ問題、わけても、価値の高い食品残渣資源の再利用、完全循環をめざす施策が待たれる。21世紀に求められているバイオマスエネルギーの確保にもつながるものであり、技術は確立されている。

政策の概要

食品残渣の完全再利用の考え方

一般家庭生ゴミ、事業系食品残渣を 家畜の飼料にする 粗雑残渣、腐敗生ゴミ、家畜糞尿等でバイオガスを発生させる。 残液は液肥として耕種農業、園芸農業に利用する。

－ 飼料の製造－

市民・事業者・行政・NPO/NGO等の連携により分別・収集・保管した生ゴミ・食品残渣を畜産農家と畜産業者が回収し飼料を製造し家畜の飼料にする。

－ 機能性飼料の可能性－

生ゴミ・食品残渣、その土地の野草や薬草等バイオマス資源を混入し進化した機能性飼料の製造も期待される。輸入穀物に勝る良質の国産飼料の安定供給も夢ではない。

－ バイオガス発生装置－

回収した生ゴミ等の中で、飼料に適さない腐敗物や粗雑残渣・有機物と家畜の糞尿でバイオガスを発生させ、飼料製造のためのエネルギーとして生活領域のエネルギーとして利用する。

－ 上質液肥の利用と有機堆肥の製造－

バイオガス発生後に残る液体の副産物は上質の有機液肥であり、耕種農家や自家用として、また牧草地等への直接散布をする。また、液肥と草木のバイオマス資源で有機堆肥をつくる。

政策の実施方法と全体の仕組み（必要に応じてフローチャートを用いてください）

生ゴミ収集の社会的しくみづくり

分別の徹底 「各家庭、学校、事業者等、生ゴミ、食品残渣を排出する者は、割り箸、爪楊枝、ホッチキス類、ビニール類、紙等と有機物を完全に分ける。」

収集の方法

- 生活者の義務として—

基本的には、生ゴミの排出者が分別を徹底し、定められた場所に持参することを原則としながらも、生活パターンの多様化により困難な場合もあることも認め、他の機能の協力を得ることも考慮する。

- 高齢者福祉・社会参加・文化伝承の視点で -

各家庭で分別した生ゴミを近くに住む高齢者が回収し公民館やボランティア家庭に一時保管する。“生きがいづくり 健康づくり小遣いづくり”としても取り組める。

- 障害者の自立と社会参加の視点で -

ハンディーをかかえる仲間たちの作業創出事業として、また21世紀型のエコビジネスとして捉え「生ゴミ資源化・農生産・自家消費・販売」等、自立をめざす事業として可能性は大きい。

- 事業者の社会的責務 -

企業市民として、事業者の社会的責務として分別を徹底し、冷蔵保管または乾燥保管して自ら再利用を進め、また、他者が資源化・循環を図ることに積極的に協力する。

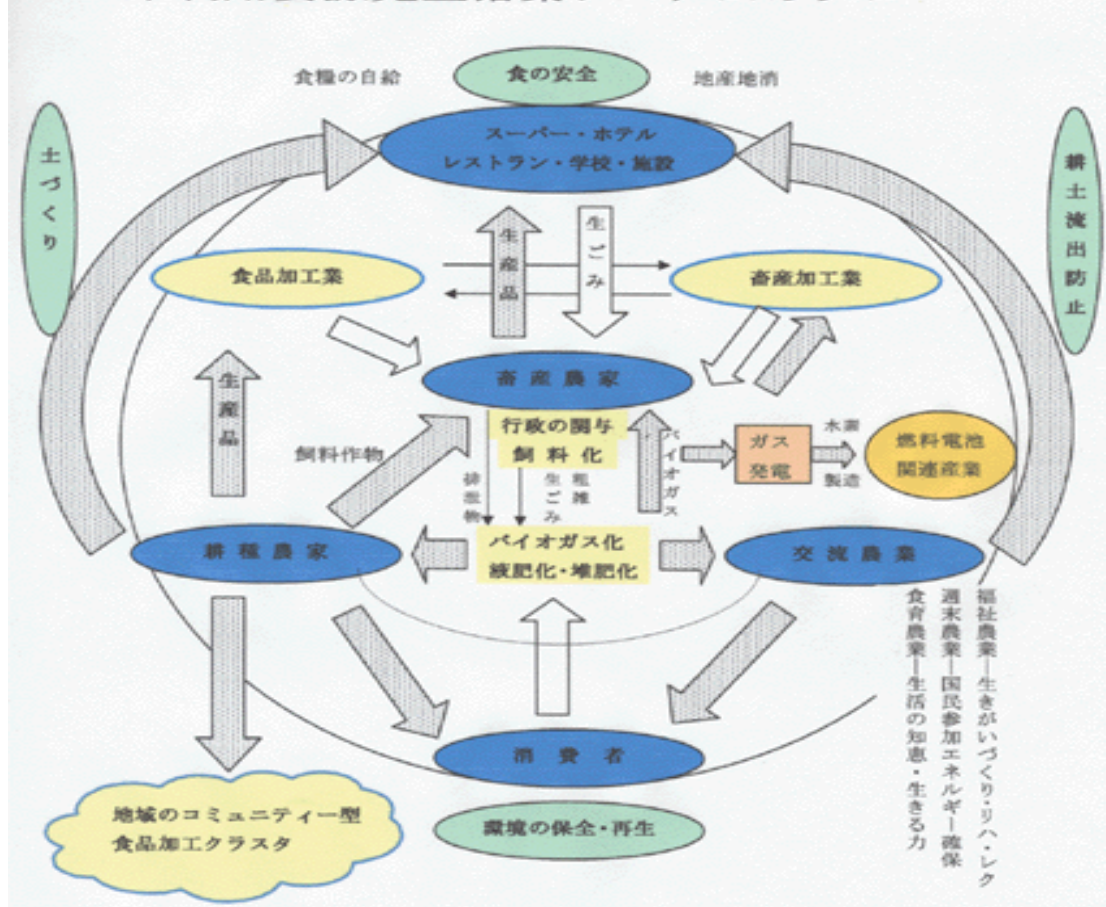
- 畜産農家・畜産業者の役割 -

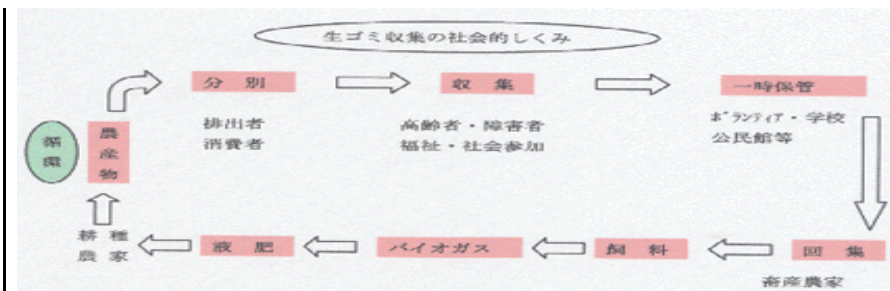
各主体が収集一時保管している生ゴミ・食品残渣を回収し、環境と衛生面に配慮し、家畜の飼料として活かす。バイオガス発生、液肥生産にも取り組む。

- NPO/NGO・行政の関与 -

市民・事業者や畜産農家等への啓発や各主体のネットワーク形成と事業推進の事務局態勢としてNPO/NGOの関与は欠かせず、制度的枠組や政策的透導の上からも行政の支援が求められ、両者のコミットは不可欠である。

未利用資源完全循環システムのフロー





政策の実施主体（提携・協力主体があればお書きください）

NPO/NGOが幹事組織となり、市民・畜産農家・畜産業者・食品残渣排出業者の有志と行政を網羅した「未利用資源完全循環事業推進ネットワーク」を組織し政策の実施主体となることが望ましいものとする。

現在、残飯養豚農家、糸満市、土木業者に呼びかけており関心を示している。

政策の実施により期待される効果

- ・ ゴミ問題の解決に有効な実証となる。
- ・ 「食品のリサイクル・未利用資源のリサイクル」の施策に込め得るものである。
- ・ 家畜排泄物の適正処理に有効であるとともに中山間地域の生活排泄物の処理利用の可能性も秘めている。
- ・ 直接エネルギーとしてのバイオガスと燃料電池原料の確保という今日的テーマの実証に寄与する。
- ・ 有機農業に寄与する役割は大きい。
- ・ エコブランド畜産物・製品の可能性を秘めている。
- ・ 都市と農村の交流・対流促進につながる。
- ・ 「生ゴミで地域興し 人育て 文化創り」のしくみづくりが可能である。
- ・ 持続的循環型社会の形成に果たす役割は大きい。

その他・特記事項

膨大な量の有機性廃棄物 - 年間排出量 -

家畜排泄物 6千5百万トン 東京ドームの180杯分

一般廃棄生ゴミ 1千6百万トン

産業廃棄生ゴミ 3百50万トン } 東京ドームお56杯分

（産業系の食品残渣は31%が飼料化されているようであるが、家庭生ゴミの飼料化は統計に出てこない）

エネルギー回収率でみると

飼料化は100% メタン化が80% 堆肥化は20% という指摘があるが納得のいく分析であると思料する。

うまい肉・安全な肉

全く同じ条件で調理方法を定め、若い男女21人ずつを対象に食味テストした結果、食品残渣と配合飼料を50%ずつ混ぜた飼料で飼育した豚肉が、有名なブランド豚を押えて人気があったという権威ある調査がある。

「肉はいつも『厚脂』『軟脂』のことが話題になるが、消費者は『しまった肉』よりも『うまい肉』『安全な肉』が欲しいのである」という研究調査した学者の指摘は説得力がある。

メタン発酵国際特許取得技術

物理法則を活かし、単純化、最大効率化、低コスト化による濃度85～88%メタン発酵技術がある。

人工エネルギーは一切使わずに発酵槽内のガス圧を利用して槽内を攪拌する技術。（驚異的表面積の濾材の開発とメタン菌の最大値を保持させる、2つのターゲットの同時達成）

圧搾気体の反覆継続利用技術により山林や遠方上方の田畑等へ液肥を輸送する技術が確立されている。

食とくらし ライフスタイルを考え

議論からしくみづくりへ

ごみ問題から資源利用の視点へ

まち興し 人々のつながり 文化創りのテーマとして

